



専業ババ奮闘記 (その2) 40

## 木幡智恵美

里帰り (1)

津和野町出身の画家、安野光雅さんの訃報を聞き、四年前の正月に松江の一畑百貨店で開催されていた作品展に足を運んだことを思い出しました。

『安野光雅のスケッチ旅行』と題されたその作品展には、中国地方を旅しながら描かれた風景画が数多く展示されていました。安野さんの絵は観るほどに心が暖まり、子どもの頃の郷愁を呼び起こすような優しく懐かしいような筆のタッチに魅了されました。

しかしその中で広島の『宮島』を描いた作品からは、他にはない異質な雰囲気を感じ取ったのです。肝心の絵よりも、その横に付された説明文が気になって仕様がなくなってしまうたのです。それは宮島にまつわる奇妙な物語でした。

二回ほど繰り返し読んだ後、再びその場に戻って改めて読み直したほどです。全作品を観賞し終わつた後も、私はその宮島が心の隅に引っ掛かったまま落ち着かず、併設された売店で件の絵と文章が掲載された作品集を買い求めました。そして帰宅してから、早速宮島の頁を開いたのです。

それは大まかに次のような内容でした。昔の

話ですが、安野さんの弟さんに親しい女性がいる、その方があるとき弟さんの前に現れて「父の意向で明日結婚式をすることに」なると別れを告げたのだそうです。それから何十年か後、安野さんにその女性と思しき人物から電話があり「相手が亡くなって自由になったので、弟さんがどうしているか気になってお兄さんの電話番号を探した」と言うので「弟は元気で連絡はできません」と答えたのです。そしてその女性は電話を切る前に「宮島口にいます。宮島口です」と言われたと。ですがそのとき弟さんは大病で入院されていて、電話のことはご本人には伝えなかったのだそうです。

この文章を読んでから宮島の絵を見ると、不思議なことに暖かいはずの安野さんの絵がとて無機質で冷たいものに感ずるのです。時折作品集を引っ張り出して頁をめくると必ずこの宮島の手がとまります。

その女性はどうなりましたか？ 安野さんにかけてきたのでしょうか。安野さんはどんな思いでこのスケッチを描いたのでしょうか。そして弟さんは……意識が宮島の中に入っていつて堂々巡りを始めるのです。

産院から帰ってくるのは、出産予定日だった一月十九日。夫の誕生日でもある。忠ちゃんが寛大と実歩を家に連れて帰ったので、夜は久々にぐっすり眠り、目覚めたら六時を過ぎていた。完全に気持ちが緩んでいる。

夫も息子も遊びに出、私は義母の身の回りの世話をし、朝食を運んでから買い物に出た。スーパーには一匹だけ鯛があった。ちと高い。でも、赤ん坊、いや宗矢が我が家に初めて来る日であり、夫の誕生日でもある。二重の祝いの日だ。迷った末、買い物かごに入れた。

昼食を義母の部屋に持っていき、私も残り物を食べて少し休んでいたら、娘たちが病院の帰りに荷物を置きに寄った。一旦家に帰り、今後我が家で暮らすのに必要な荷物を積み込んで夕方に来るといふ。

運ばれてきた荷物の整理にかかる。居間は娘と宗矢が当分居座ることになる。まずは、床を敷き、紙オムツなどは枕元に並べた。祝いにもらったという種々の箱類をとりあえず一つのコーナーに収め、これから運んでくるであろう荷物の置き場スペースを空けておく。寛大と実歩の着替えは、部屋の隅に寄せた。

それが終わると夕食準備だ。鯛のうろこを取り、内臓を除き、水を入れた魚焼きグリルに入れる。何とか入りきった。大きな鯛だ。これをメインに、赤飯、ほうれん草の胡麻和え、根菜の煮物、シジミ汁が夕食の献立。寛大も実歩も、赤飯以外は全部好みのメニューだ。あとは白いご飯をしかけるだけ。

六時に皆がやってきた。忠ちゃんは帰って食べるというので、まだ帰ってこない息子と、まだ食べられない宗矢を除いて、六人の夕食は大賑わい。寛大も実歩も、お母さんが久々に傍にいたので上機嫌。

風呂はいつも通り夫が寛大と実歩を入れ、上がってきた二人の始末を私がする。娘が入っている間、宗矢を預かり、義母を寝せてから私が風呂に入り、寛大、実歩を寝かせた。

実歩も、気持ちが緩んだのだろうか、うちに来て初めて世界地図を描いた。

30代フリーター やあ、ジイさん。朝日新聞の最新の世論調査（1月23、24日）では、内閣支持率が33%と、不支持の45%下回り、両者が逆転した。年金生活者 新型コロナはこの1年、私たちの社会のあり方を問い続けてきたのに、理念より実利、総論より各論の菅政権は、理念、総論なしに答えることのできないこの問いの前に立ち往生し、国民の不信を広げた。

30代 調査結果では、菅義偉がコロナ対策で指導力を「発揮している」は15%しかなく、「発揮していない」が73%におよんでいる。

年金 三上治はコロナに追い詰められて退陣した安倍晋三のことを「『身体が動かない』という反応」を示したと指摘した（「『人生わずか五十年、夢幻のごとくなり』というけれど」、「『流砂』19号）。その理由のひとつとして、安倍の「政治理念」をあげる。国家主権を強化すること、国家主義を強めること、軍人や武器をたくさんそろえること、それによって国民の生命を

守るといのが彼の理念であり、それはコロナに対しては無力だった、と。

安倍晋三は、アベノミクスや女性の活躍や働き方改革といったビジョンを次々と掲げて見せたが、それらはいずれも借り物であり、彼自身の理念から出てきたのは憲法改正をはじめとする国家主権の強化だけだった。菅義偉には安倍のような自らの理念をもとにした国家観がいばかりか、借り物のビジョンすらなく、支持率低下の速度も速い。

社会と政治のあり方はこのままでいいのかという、新型コロナが全世界の人びとに対して発した問いに、自らの理念やビジョンをもたない政治家はまともに応答することができず、国民はそんな政治家を見て頼りないと感じる。

30代 コロナ対策をめぐるっては、政権への評価が低いのは対照的に、大阪府知事の吉村洋文への評価が高い。

年金 彼の所属する大阪維新の会がその理念とビジョンを「大阪都構想」と

も抜かりなく取っているように見える。

30代 2度目の緊急事態宣言が栃木県を除いて延長されたが、昨年4月の1回目の宣言時と比べると人出は増えている。

年金 国民は以前ほどは新型コロナを恐れなくなっている。1回目の宣言

いう名で掲げ、その実現に力を尽くしたことが要因のひとつとなったと私は見ている。そうした「構想」を持ち得る政党、政治家だからこそ、独自の「大阪モデル」をつくり、それをもとに対策を取ることができた。

30代 経済を一時犠牲にして感染防止を最優先する左派・進歩派と、経済との両立を重視する右派・保守派が対立している現状は、3・11原発事故のあとの反原発派と原発容認派との対立に似ている。イデオロギーの介在する余地のないはずの「科学的な知見」を双方とも抛りどころにしながら、その主張は隔たっている。

年金 感染防止最優先の左派・進歩派を「コロナ左派」、経済との両立重視の右派・保守派を「コロナ右派」と仮に呼ぶことにすれば、感染防止という一点に対処を集中する「部分重視」の主張をしているのが「コロナ左派」であり、経済も視野に入れた「全体重視」の主張をしているのが「コロナ右派」ということができる。

時、このウイルスが恐れられた大きな理由のひとつは、欧米での感染爆発だった。今に日本もニューヨークやパリやロンドンのようになるかもしれないというメッセージがマスメディアやネット上に流れた。実際にはそうならなかった。しかも、欧米のようなロックダウンのない「自粛」だったにもかかわらず、人口あたりの感染者、死者は欧米の数十分の一で推移した。

山中伸弥が「ファクターX」と呼んだこの違いの要因は実証的には解明されていないが、国民は違いがあることだけはこの数カ月の経験で感じ取ったはずだ。それが外出の自粛を昨春よりも緩めるという行動となつてあらわれたと見ることができている。

ウイルスが絶滅することはあり得ないから、おそらく次の冬もコロナの感染者は増加のカーブを描くだろう。そのとき国民は新型コロナを気温の低下にとともに流行する季節性のインフルエンザとあまり変わらない感染症と感じ始めるかもしれない。

双方の主張にはそれぞれ理由がある。危機が到来したとき、ふだんの営みを中断して、使えるリソースを危機への対処に集中的に投入するのは当然だ。とりわけ初期段階ではそうした「部分重視」が必須となる。しかし、それを続けていると、ふだんの営みが犠牲になり、別の危機が生じる。そのため、おのずと「全体重視」が求められるようになる。

「コロナ左派」と「コロナ右派」の対立は、コロナへの対処が「部分重視」にも「全体重視」にも偏らずに均衡を保つために必要な対立と考えることができる。だとしたら、どちらも譲歩しないほうがいい。でないと均衡が崩れ、かえって危険だ。

朝日新聞の世論調査では、2度目の緊急事態宣言のタイミングが「遅すぎた」が80%にのぼっており、それを見る限り国民の多くはいま「コロナ左派」に傾いている。他方で、「コロナ右派」の自民党に野党をはるかに超える34%の支持率を与えて、左右の均衡

ニュース日記 772  
中村 礼治

## 「コロナ左派」と 「コロナ右派」